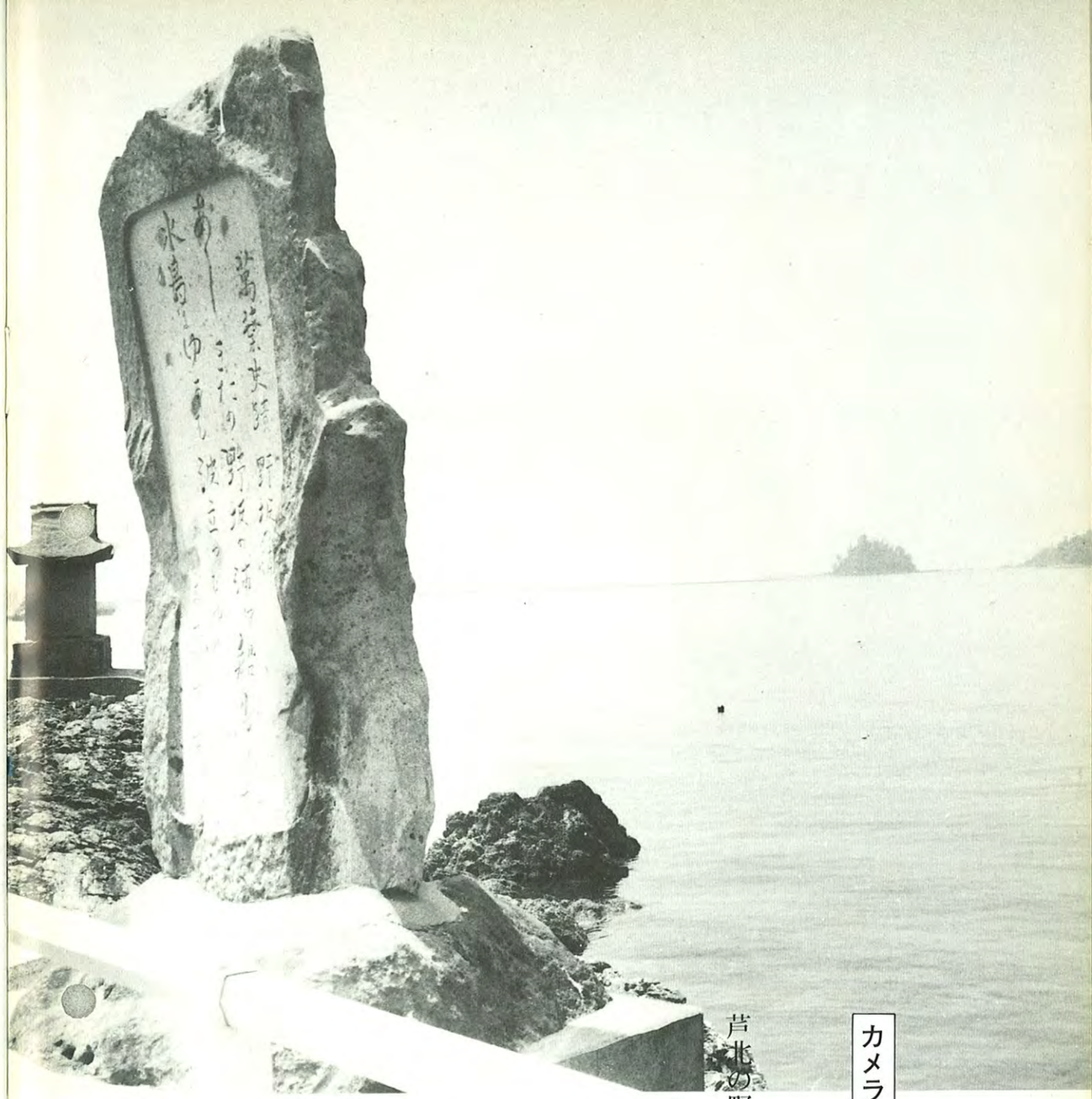

カメラ探訪

芦北の野坂の浦ゆ船出して
水島に行かむ波立つなゆめ

長田王

長田王の歌として、万葉集巻三に出ているもの。歌はこのほかに二首が載っている。歌にある「野坂の浦」がどこであったかについては論争の多いところで、定説はないようである。

遠くには、天草の島々や雲仙岳も望まれる。

（写真は、芦北海岸に立っている歌碑）

明日の熊本

◆私の提言

時代の要求に応え得る明日の熊本のために

九州日本電気株式会社取締役会長　早志忠之

わが九州日電が熊本で仕事を始めてからこの三月で満十三年になる。従って、会社のスタートから始まった私の熊本生活もはや十三年と言う事になる。いや、私は、いわゆる熊本の「じごろ」なので正確には熊本に帰ってから十三年と言った方が正しい。そして今、私は会社が熊本に設立されて本当によかったと心からそう思っている。また、現在二つの子会社、十余の協力会社共々地元へいささかなりとも貢献しているものと自負している。

さて、九州はシリコンアイランドと呼ばれ世界に於けるＩＣ（集積回路）の三大生産地の一つにあげられており、国内では熊本が第一の生産県とされている。このようにＩＣ企業の育つ要因として常にとりあげられるのが、「きれいな空気ときれいで豊富な水、質の高い若年労働力、空港、電力、それに大学」である。確かに、熊本はこのすべてを充たしており、先端産業の立地条件としては申し分のないところである。しかし、私が本当に熊本に立地してよかったと思うのはそれ以外にもある。従業員が「すなお」で皆よく働く。それに人情というのか柔らかい雰囲気を膚に感じ、とに角のびのびと仕事が出来る事である。また、地元の目に見えない協力である。（よく「足の引っ張り合い」と言う言葉を耳にする事があるが、私は未だその経験はない）こう感ずるのは、私が熊本人である故だろうか。確かに私は、熊本の悪口を言われるといやで何か反論をしたくなる。しかし、熊本も決して良い事づくめではない。冷静に受け止めると、単なる悪口でなく有難い忠告も多い。特に、県外の人にとって熊本は住みよい条件ばかりそろった所でない事も事実である。熊本は、元来「保守性の強い所」と言われている事は大方の県民はご存じだろう。保守性も度を越せば、後進性を意味する。そして「よその人」とつき合いの出来ない自閉的なものとなり、世の進歩から取り残されてしまう結果になる。熊本に職場のある九州外の営業マンから次のような意味の言葉をよく聞く事がある。即ち、「熊本は仕事のやりにくい所である。顔がないと仕事に結びつかぬ。顔のきく世界、それに政治的力が強すぎる。保守王国である」と。我々熊本人は、この言葉をどう受け止めたらよいだろうか。経済大国日本は、今欧米のいわゆる先進国との間で経済摩擦を起こしている。勿論、原因は一つや二つではない。こちらから見れば、もっとやるべき事をやってから文句を言えと言いたくもなるだろうし、また出る杭（くい）は打たれると言う諺（ことわざ）もあるが、相手から見れば世界の経済ルールを知らないと見えるかもしれない。いずれにしても一方的であっては、話はまとまらない。わが熊本も超保守的なつき合いにくい所だと思われては損である。政治や行政の一部の人に任せっぱなしにせずに、県民全体で考えねばならぬ問題だと思う。明日の熊本のために。

さて、産業界を見てみると熊本は昔から農業県であり、今も農業県である事に変わりはない。しかし、ここ十数年来変革が起こりつゝある事も事実である。県外からのいわゆる誘致企業を中心に二次産業の比率は増加しつつあり、また地元企業で県外へ進出しているものもある。しかし、中小企業を主体としたいわゆる地場企業の全体的なレベルは、決して高いものではない。これまでは、県内だけに目が向けられていたのでその程度でよかったのだろうが、これからは先端産業とも取り引きを始め、県外はおろか海外の企業とも堂々と取り引き出来る強力な体質にもって行かねばなるまい。もう狭い県内だけで行動する時代ではない。幸いに、テクノポリス問題が取りあげられているが、これを一つの起爆剤として地場企業の浮揚をはかるには、絶好のチャンスだと思う。行政、政治、また国や県市の補助、援助だけを当てにせず、県内企業者が一丸となり知恵を出し合って真剣に考え、実行に移る本当によいチャンスだと思う。そして、バイオテクノロジーも既に芽生えている。

熊本が二十一世紀の先端産業の一つの基地となる事を期待したい。